

## 日韓言語文化研修プログラム 2005

荒井典子<sup>1</sup>・玉井芳恵<sup>2</sup>

2005年8月5日～11日の一週間、韓国のカトリック大学校から教員1名、学生16名の計17名が来日し、信州大学生と交流を図った。信州大学人文学部が主催する「日韓言語文化研修プログラム 2005」と命名されたこのプログラムは、大学全体に広く開かれたものであったが、ここでは、人文学部で日本語教育学を学ぶ学生としての立場から述べていきたい。

全体目標に「心を開き、礼を尽くして交流する」ということを据え、人文学部で日本語教育学を専攻している私たち（日本人学生16名、中国人留学生7名、カトリック大学からの一年間交換留学生5名）にとっては、日本で行われる第一回目の韓国カトリック大学日本語文化研修であった。実は私たちは日本語教育学分野として過去に4回韓国に赴いている。これまでは諸事情により相互に行き来することが困難だったのだが、今年度多くの方々のご支援ご協力により、初めて実現する運びとなった。

そもそも信州大学とカトリック大学との関係は5年前にさかのぼる。初回はカトリック大学姜錫祐研究室と信州大学沖裕子研究室という研究室単位の交流であった。その後2001年、大学間国際学術交流協定の締結により第二回はカトリック大学言語文化学部と沖研究室との相互交流に広がった。また、第三回研修において信州大学側は複数の研究室からの参加を得、昨年行われた第四回交流は主催に人文学部日本語教育学分野、共催に人文学部という形を取り、人文学部国際交流委員長の参加、両大学の事務職員交流、人文学部同窓会より副会長の参加をも得た。この研修には実際、私自身も参加させていただいている。このような経緯を経て、昨年自分たちも参加した研修の逆の立場として「対等互惠」の精神で、今年、日本における第一回目の韓国カトリック大学日本語文化研修が実現に至ったのである。これは長年韓国を舞台に培われた交流が場所を変えて日本で開催されたものであり、互いの協働によって実現されたものであるといえる。

本研修の特長のひとつに、一週間の前半を松本市で過ごし、後半を穂高町で過

---

<sup>1</sup> 信州大学人文学部4年日本語教育学専攻

<sup>2</sup> 信州大学人文学部4年日本語教育学専攻

ごすという活動拠点の移動があった。前半部分の松本市では、主に松本ぼんぼんへの参加、松本城見学、日本語教育実習等を行った。後半部分の穂高町では高橋節郎美術館見学、大王わさび農場、穂高神社見学、そば打ち体験等が行われた。

松本市部分の初行事、松本ぼんぼんでは松本市役所広報国際課、松本市留学生応援ファミリーの会の皆様にご協力いただいた。この祭りのように街中を踊り歩くものは韓国にはなく、その上浴衣を着ることができるということもあって学生たちのテンションは最高潮であった。途中雨が降ってきて中止となる事態が起こってしまったが、初めて日本の「祭」を体験した学生たちはその雰囲気と人々の熱意を感じ取ってくれたようである。また、さまざまな体験実習がある中で、座学の実習である日本語教育実習も行われた。本研修の日程には実際見て感じ取ったり、人と接したりする中で体験的に学ぶというものが多かったが、座学の実習を行うことで日本に対するより深い知識を深められたと思う。

穂高町に拠点を移してからは、穂高町町長はじめ、穂高町役場の皆様、町民会館の皆様に事前準備から事後整理まで大変お世話になった。穂高町部分でもいくつかメインとなる行事を組んでいたが、その中の一つであるホームステイを実行するにあたって、穂高町関係の皆様の御尽力については本当に感謝の気持ちにたえない。今回、穂高町の皆様と触れ合った中で一番嬉しく思ったのが、皆様が「交流しようとする気持ち」を持ってくださったこと、「成功させる」という気持ちを共有できたことであった。交流というのは、「交流しようとする気持ち」が一番なくてはならないものである。携わる全ての人に目的があり、それがたとえ同じ目的でなくても、個人個人が「交流したい」という気持ちを持つからこそ成功するものなのだ、と実感した。ホームステイは穂高町の方々にとっても私たちにとっても初めての取り組みで事前には不安もあったが、実際終えてみて、それは余計な心配であったことがわかった。ホームステイ後、全ご家庭を招いて行った送別会・報告会では、どのご家庭の方も皆すがすがしい顔をしておられ、ここにもまた、世代や国籍を越えた「顔の見える交流」が行われたことを実感した。これは全体目標であった「心を開き、礼を尽くして交流する」というものが達成された瞬間でもあったと感じられる。個人的な話であるが、実行委員として慌ただしく動いていた私に、何人ものカトリック大生がねぎらいの言葉をかけてくれた。互いが互いを思いやり、気にかけて行動する、そんな場面にくつも出会えた。

現在、両国間のさまざまな問題に解決の糸口が見えないという事実がある。しかし、この一週間を共に過ごした私たちには学問的見解から互いを認め合い、理解しあえることができた。

両国のさらなる発展を望むと共に、政治的なわだかまりが互いの理解をもって解決されることを願っている。願うだけでなく、一歩踏み出す必要がある。その架け橋となるのが私たちの世代なのである。